

## F-3 稲作共同社会

### 590. 灌漑の風景

水田による稲作の特徴は灌漑である。灌漑なくして水田耕作はありえない。大昔の稲作は涌水や谷川の小規模の灌漑に頼っていた。小規模といえど灌漑は単独耕作者の規模を超え複数の共同耕作者がいるはずである。

水田は次第に谷あいから平野へ拡がるとともに稲作社会の高度化を意味する。日本で言えば弥生時代から古墳時代に入る。灌漑を支える共同作業は川を堰きとめ、農地を貫く水路を掘削する。田植えの時期に合わせて取水し、取水した水は満遍なく関係者の水田に行き渡らねばならない。干害に備えて溜池を掘削するのも共同作業である。

自分の畑だけを耕しておればよい畑作と異なり、水田稲作は共同作業を前提としている。バリ島ではスパク(→596)という灌漑組織が農作業を定めている。ジャワ社会ではゴトン・ロヨン(→593)という共同作業に基づく稲作共同社会を形成している。

水稲耕作では農地の広さもさることながら灌漑に使う水の量が問題である。川から直接に田に水が導かれるケースは希である。多くはかなり上流から取水されて用水路をへて水は供給される。灌漑施設とはダム、水路、堤防、分水門、暗渠、高架水道、貯水池からなる。時には取水地から10~15 kmにもなる。

日本とインドネシアは同じ稲作に基づく共同社会として共通点が多いが、両者の農村には相違があるように思う。日本の農村は排他的で《閉鎖的》であるのに対して、インドネシアの農村は人の出入りは自由で《開放的》に見える。

この差の起因は灌漑のあり方に関係しているのではないか。日本の場合、灌漑用水の必要性は特定の時期に集中することが水争いとなって閉鎖的になる。一方、インドネシアの場合も稲作に灌漑は必要であるが、種まきの時期をずらせることや他の作物に切り替えによって多面的な農業の維持が可能である。インドネシアの農村は共同社会であっても開放されたゴトン・ロヨン社会といえる。

ジャワで近代土木技術による大規模な灌漑が大河川の平野で行われるようになったのは土木技術の得意なオランダのそれなりに評価される植民地行政の成果である。オランダが灌漑に熱心になったのは水田耕作地を取り上げてプランテーション(→505)作物の砂糖の栽培面積をふやす目的であったが、オランダが引き揚げて残された灌漑施設はそのまま稲作が利用されることになった。

大規模灌漑によって東部ジャワのプランタス川(→144)や中部ジャワのソロ川(→130)の沖積平野の生産力が著しく増し、結果としてジャワ島の人口も増加した。スハルト体制において地方開発の目玉として河川の総合開発が行われ、多目的ダムの建設により灌漑用水の確保が一段と進んだ。

### 591. ジャワの農村

インド東部から東南アジア、中国南部、日本を北限とするモンスーン地域の拡がりには米を主食とする人々からなる稲作文化圏である。稲作文化の共通性と見えてインドネシアの田園風景は日本とよく似ている。あえ

て相違を探すならば水田の彼方に見える木立がヤシの木である。本来、稲は熱帯植物である。熱帯の米作りのメリットとして二期作のみならず三期作さえ可能である。

農耕用の牛がのんびりと草を食んでいる。かつての日本の風景で今は見られなくなった風景である。日本の農家では物置においたままか、何とか資料館に鎮座する手動式の脱穀機も現役で活躍している。

ジャワの農村の「デサ(des)」は行政単位であるが、同時に自給的単位であり、小さい別世界であり、かつ宗教的コミュニティである。デサはジャワ人にとっては一つの秩序の表われでもある。農村の成り立ちというのは自然発生的に見えても更に深い意味あいがある。そこには民族の持つ哲学の表現が読み取れる。

ジャワ人の哲学によれば宇宙は球形をなしており、デサもその構成要素である。デサの中央に開拓者の家がある。デサの核というべき中央は四つ角になっており、開拓者の家の四つ角における位置も決まっている、ジョグロ(→794)という屋根の形も一段と高い。後は放射状に形成されていくのがデサのパターンである。

村には村有の田地があり「職田」として村長や村役人に与えられた。農民は無償で労働力を提供し、村長がその収益を報酬として得ていた。

ジャワ農村には地主、自作農、小作農、農業労働者という階層がある。この階層は農民の生涯の変らない階層というよりは一人の農民の生涯のステップという一面がある。すなわち若い時は親のもとでの雇われ労働者であり、結婚し独立すると小作農になり、親からの財産を分けてもらうに従って自作農あるいは地主になるというステップである。

地主と小作というと封建の人間関係がついてまわるが、ジャワ社会の場合は自作農が自分の労働力で耕作が出来るにもかかわらず親族に小作させてやるということがある。

このような社会では〈富める者〉と〈貧しい者〉間の階層の差はそれほど大きくない。農産物の価格が低下すればデサの全員が貧しくなって“貧困の共有化(→640)”といわれる現象が生じる“共貧社会”である。

デサの自給農村社会には大都市の住民を苦しめるインフレの影響も軽微である。熱帯モンスーンの風土では仮に稲が不作であっても餓えを満たす何らかの代用食があり餓死するほどのことはない。

飢饉に備えて収穫の一部を協同でルンブンという倉庫に保管しておく制度もある。ゴトン・ロヨン(→593)という互助制度やグーグル・グヌンという協働の慣行が行われている。これらの近代化に巻き込まれる以前の牧歌的なジャワ農村は次第に変容をとげているのも事実である。⇒732.農村の変容

## 592. 稲作の互助組織

稲作は犁耕に始まり、種まき、田植え、除草、水路の手入れ、害獣鳥の見張り、稲刈りの一連の工程である。このうち田植えと稲刈りは限られた期間に集中的に労働力を必要とする。

農作業の助け合いが必要となる。助けた方は見かえりを受ける。後で同じ作業で返してもらう、収穫物か食事の現物でもらう、現金をもらう、などの選択肢がある。「サンバタン」は食事つきの労働交換というもっとも基本的な形態であり、同村の顔見知り、親類間で行われる。

地主と田を持たない農民の間では「セプロカン」またはパケハンという田植えと稲刈りをセットにした慣習がある。田植え時の労働の対価を稲刈りの収穫物から分けるものである。現金を払わなくてもすむことが地主のメリットである。

田植えや稲刈りは基本的には女性の作業であるが、犁耕などには男性労働力が提供される。一連の労働

の対価の分け前は一定の率による。労働提供者の得る配分率は田植え、稲刈り以外の労働提供度、土地と労働力の需給関係、土地の習慣などで決まり、1/2 から 1/10 までと範囲は広い。

いよいよ収穫が始まるに際してはドクン(→866)に相談して稲刈りのための良い日が決められる。先だって儀式やスラムタン(→705)が行われ、稲刈りの参加者が招かれる。セプロカンの労働者は優先して収穫に参加し分け前を得る。

特筆されるのは「バオン(bawon)」といわれるジャワの収穫方法の慣習である。田の持ち主から稲刈りの日は予め村人に告げられているので、その日は不必要に大勢の人が田に群がってくる。収穫には村の女性の誰でも参加できほとんどが女性であり、収穫の約1割(地域により異なる)をもらう慣習である。

インドネシアの稲の収穫作業に「アニアニ(aniani)」という小刀で稲の穂の部分だけを刈り取る穂つき<sup>1</sup>の方法がある。稲の成熟度にムラがあるため熟した穂だけを摘む。品種改良前の稲のため穂から実が落ちやすい。穂に実をつけた稲は妊娠しているから慈しむように丁寧に扱われる。稲の女神デヴィ(→698)に対するジャワ人のみならずインドネシア人共通の信仰である。

バオンの収穫分配システムによって、ジャワの農村では田を所有しない未亡人も貧しいながらも何とか食っていけるだけのシステム<sup>2</sup>が機能していたが、稲の新品種の採用、アニアニから鎌へと収穫道具の変遷等による貨幣経済への適応によってバオンの風景は次第に見られなくなった。

20 世紀初頭より始まった「ケドック」という制度は稲作作業の請負制である。小作に代わり請負人は必要な時期だけ農業労働者を雇い入れる仕組みである。地主は収穫の一定量を得るだけで諸般<sup>わづら</sup>の煩わしさから解放される。村の女性が群がったジャワの農村の稲刈り風景は過去の映像になったらしい。

### 593. ゴトン・ロヨン

ゴトン・ロヨンはジャワ語の「gotong=運ぶ・持ち上げる」「royong=一緒に・集まって」の意味で、ジャワの農村社会の相互扶助の慣習である。共同作業が必要な水田耕作を行うための原理はジャワ農村の共同社会原理に拡大される。

ジャワの村社会では「全員で話し合い全員の合意をうる」という伝統に基づき、祭りをを行い長老を選出し協同奉仕を行ってきた。村社会の協同作業として水路や橋や道路を建設しその補修をする。家の普請や冠婚葬祭の際には隣近所が総出で手伝う。同じ稲作社会に生きる日本人にとっては“結い”という<sup>じっこん</sup>制度である。

しかしゴトン・ロヨンにはもっと広範囲の意味を包含している。例えば、娘の結婚式の費用を知人から借りる。借り手は返せる範囲で返す。一方、貸し手も督促がましいことはしない。部外者が計りえない微妙なバランス感覚である。

スカルノ大統領は在学中から政治運動に専心していた。卒業できたのは試験の際のゴトン・ロヨン(カンニングの意味?)のおかげであると本人が自叙伝で語っている。

このゴトン・ロヨンの用語が政治的な意味合いでも使用されるようになった。スカルノは西欧式の議会制民

<sup>1</sup> 日本の弥生時代の稲作の遺物としてアニアニと同じ石製の小刀が出土している。日本の稲作も穂つきが行われていた。

<sup>2</sup> インドネシアの公務員は数ヶ月に一度「kerja bakti=勤労奉仕」があり、清掃や草引きなどの作業を行う。日本占領時代の「kinrohoshi」の名残である。

主義のインドネシア導入に疑問を持っており、インドネシア自前の原理としてゴトン・ロヨンを信奉し、パンチャシラ(→365)の根幹としていた。独立後のインドネシア政局の混乱に対してスカルノ大統領が政党政治を廃し、インドネシア流の指導される民主主義(→379)を導入したのはゴトン・ロヨンの裏付けがある。

事ある毎にゴトン・ロヨンを唱えるインドネシアの政治形態が奇異に見えても、それはインドネシアの社会原理からくる生活の知恵である。ゴトン・ロヨン社会を支えるのはムシャワラ＝話し合い(次項)であり、ムファカット＝全員一致(次項)である。

スカルノ大統領の失脚後もゴトン・ロヨンはインドネシアには琴線にふれる言葉であった。しかし稲作に馴染みがうすい東インドネシアではゴトン・ロヨン社会は成熟していない。彼らにとってゴトン・ロヨンとは政府の出先機関が道路建設など住民に強制するタダ働きの労働奉仕<sup>3</sup>として敬遠されている。

日本人にゴトン・ロヨン社会が理解しやすいのはジャワと日本のムラの共同社会原理には共通するところがあるからである。「nemawasi」というのは今や国際的な経営用語となった。この“根回し”を最もよく理解している外国人はおそらくインドネシア人でなかろうか。

その他にゴトン・ロヨン社会を特徴づけるキーワードとして家族主義(→573)とルクン＝調和(→597)という言葉が西欧の書に取り上げられている。農業従事者が10%を割っても稲作社会の伝統を引き継ぐ日本社会には特に説明の必要のない馴染みのある言葉である。

ゴトン・ロヨンの共同社会のその反面としてのいやらしさを持つ。徳川庄政の下に涵養された日本の農民の「隣の不幸は鴨<sup>かも</sup>の味」という水田耕作民の心情を表した陰湿な人間関係はインドネシア人、特にジャワ人に見うけられる。

## 594. ムシャワラ/話し合い

《遊牧社会》では〈指導者による独断〉で機敏な対応をしなければならない。これに対して農業社会、特に《稲作社会》では〈全員による協議〉が向いている。どちらが良いとかいう問題ではなく、置かれた状況の差であらう。

インドネシア農村社会はゴトン・ロヨン(前項)という相互扶助の共同社会原理から成り立っている。そのゴトン・ロヨン社会の運営の仕組みを支えるは「ムシャワラ(musyawaharah＝話し合い)」と「ムファカット(mufakat＝全員一致)」である。

ムシャワラは何事も共同体のメンバーによる協議の必要性和重要性を意味している。稲作社会の日本の村の“寄り合い”と同じである。ムシャワラの特徴はムファカットである。一人でも反対者がいる限りムシャワラは続けられる。そのうち疲労困憊してくると元の対立点は何がなんだか分からなくなる。最後は長老に下駄を預けることに全員が合意する。始めからそうすれば簡単だと思うが、ムシャワラのプロセスを経なければならない。

どちらが勝ったとか負けたかが明らかでない。全員一致のムファカットであれば内容が少々悪くてもよい。日本の村の寄り合いは“談合”とも言われるが、今では建設業界用語に転用され、『dangou』として英語の辞書にも載っているらしい。日本語の“談合”も、インドネシア語の「ムシャワラ」や「ムファカット」も共通の土壌(水田耕作)の産物である村用語である。

---

<sup>3</sup> 海岸部では漁船からの魚を市場へ運ぶ際にわざと魚を地面に落とし待ちかまえている子供が拾うという光景がある。鶴見良行著「フィールドノート①」

「ムシャワラ」や「ムファカッ」は極めて稲作的であるが、言葉の語源がアラビア語である。実はイスラム教の影響が強い。イスラム教では信徒は神の前に平等であり、相談をしながら事をすすめる。イスラム教の稲作社会への適応の形態である。

西欧の民主主義では話し合いで意見が対立して結論が出ない時、最善の策として多数決という決着方法によることとしている。しかし多民族国家のインドネシアでは多数決とは小民族を切り捨てることである。

100 からなる集団の意志決定は 100 全員の同意が必要である。物事を 51 の賛成だけで決めて 49 を切り捨ててはならない。これがインドネシアのやり方である。多数決が行われるのはゴトン・ロヨンが機能しない、いわば異常事態である。

インドネシアでは独立以来、スカルノ大統領・スハルト大統領を「ムシャワラ」や「ムファカッ」で選出してきた。その結果、大統領の独裁化を招いたように「ムシャワラ」や「ムファカッ」は万全ではない。

スハルト政権崩壊後の大統領選出は立候補者から多数決制度による選出が実施され、ワヒド大統領(→411)はインドネシア史上初めて多数決で選ばれたが、その結果、政局の混乱はひどくなり途中退任を余儀なくされた。

話し合いは共同社会の立派な運営原理である。日本でも稲作社会の仕組みは現代日本の企業文化にも引き継がれている。一見、非効率にみえる会議が組織全体の合意の形成と意志伝達の場となって結果的には全体の効率の向上に寄与している面がある。

## 595. バリの村落

バリ農村は「バンジャール(banjar)」という社会的な最小単位からなる。バンジャールは慣習的に成立した集落で通常 20~30 の家族からなるが 200 というものもある。

そのウブド近辺の典型例によれば村の中心は十字路で公共施設のある広場である。北が山(アグン山)の聖なる方角であり、南が海になる。村の寺院であるプラ・デサが広場の東北の角を占め、バレ・バンジャールが隣接している。王族の屋敷、市場、闘鶏場(→832)、半鐘のクルクル塔、ブリンギン(→050)の樹が村の広場の風景である。

「バレ・バンジャール(bale banjar)」は村の集会場である。祭りの相談とか準備を行う場所である。バンジャールによっては座る場所が年齢に従って個人別に定められている所もある。高齢者が死ねば座る場所が順次繰り上がる。バレ・バンジャールに集まった男達はガムラン(→917)の練習に余念がない。暇があれば煙草やトゥアク酒(→837)を飲み、文学も論じるというクラブ・ハウスのようなものである。言い換えればバリ男性にとって家は食事と就寝の場であり、それ以外の時間は共同社会のために費やされる。

村に住む王族とは中央から派遣された王の一族が土着化したものであり、カースト(→642)における身分の高い人として尊敬を受ける。政治的影響力を持っており、共同作業を免除されるなどの特権を認められている。

ブリンギンはクワ科の熱帯植物で聖なる場所に植えられる。枝から気根が垂れ下がり、地に達すると幹になる。熱帯の豊穡な生命力を連想させることから聖樹として敬われている。大木の日影は憩いの場になる。

檣やぐらのような建物である「クルクル(kulkul)塔」の丸太太鼓は村の拡声器である。丸太が吊してあるように見えるが、中がくり抜かれているため叩くと『トントン』と村中に聞こえる甲高い音が響き渡る。伝達手段として集

会などの合図に使う。日本の村の半鐘のように用件別の鳴らし方のリズムが決まっている。早打ちの連打は火事、泥棒、アモック(→575)、駆け落ち婚(→650)などの緊急事態の発生を告げる。村人は武装して直ちに駆け付けねばならない。

観光でバリ島が賑わえば村からホテル勤務の人もでてくる。これらの人はクルクルが合図しても駆け付けられない。その分は金銭による解決方法がこじられている。その代わり祭りの際は普段ご無沙汰の分を取り返すだけの働きをしなければならない。

バリ人にとって男は結婚すれば自動的にバンジャールの成員になる。これはバリ農民の義務である。生活はバンジャールを中心としている。バンジャールの行事を3回さぼると家族もろともバンジャールのメンバーから外される所もある。

加速度的に個人主義化した日本から来た人がバンジャールを見て桃源郷のように錯覚してバリ人と結婚する人がある。初めのうちは珍しくて面白おかしく過ぎても、おおよそプライベートという概念さえない生活に耐えることは難しいようである。

⇒641.バリ社会とは

## 596. バリのスバク

バリ島のなだらかな火山の裾野にゆるやかに等高線の曲線が描く階段状に連なる水田の風景は地球をカンプバスにした壮大な芸術品である。棚田の両脇は深い切れ目となって谷の底には川が流れている。

水田の景色は見慣れている日本人にとっても素晴らしい景観である。日本の棚田には休耕田に休耕田があるとやるせない。

オランダが持ち込んだ近代土木以前からインドネシアでは秀れた灌漑システムが発達していた。それはバリ島の「スバク(subak)」である。水田への灌漑は火口湖など河川の上流が水源となっている。水は田から田への流下方式でなく水路を通して配分される。

麓に分散する数百の村へ作物の植えつけの状況に応じて適宜適量の水が供給される。稲作は植えつけ後の初期の段階では大量の水を必要とするが、その後はそれほど必要でない。従って植えつけの時期を調整することにより効率化を図れる。普通は上から田植えが始まり順次、下に降りていく。稲刈りも同じである。

さらにスバクは単なる灌漑以上の機能を持つ。即ち耕地利用のスケジュール管理である。バリ島の土地利用は環境面も考慮されており害虫や鼠の駆除のための休耕もおこまれている。

スバクによって土地の生産性は衰えることなく、かつ、最大限に有効利用されている。膨大な時間と費用をかけて電子計算機で計算してみたら現状のスバクのやり方が最大の収穫をもたらすことが解った。スバクの叡知は電子計算機を上回っていたという記事<sup>4</sup>が紹介されている。

灌漑施設の建設、管理維持を行う組合組織がスバクである。スバクのメンバーは水田の所有者であり原則としてメンバーは平等の権利を持つ。バンジャール(前項)はスバクと必ずしも一致しない。一つのバンジャールのメンバーは複数のスバクに加入している。またスバクの構成メンバーも複数のバンジャールの農民からなる。所有田が分散している場合は一人の農夫が複数のスバクに加入する。

スバクは生産手段を共有するという共同社会である。水源には水の神をまつる寺院がある。その僧が灌

<sup>4</sup> スバク紹介記事 NEWSWEEK(Mar 13,1989)

漕を取り仕切っている。水路の分岐点にも寺院や祠がある。村の寺院と同様にバリ暦に従いお祭りがある。その他に通水式は重要な行事である。

一つのスバクの運営は理想的に見える。しかし同じ河川から取水するスバク間の水争いまで調和的に解決するシステムを内蔵しているわけではない。昔から水をめぐるスバク間の紛争は絶えない。スバクは水の配分を受ける権利であり、メンバー間で水の貸借も行われる。盗水などの違反した場合の罰則も定められている。

タバナン(Tabanan)にスバク博物館があり、バリ農業の仕組みが分かる。タバナンにあるのは観光地のタナ・ロットだけではない。

⇒046. 水田の風景

## 597. 隣組/RT

早朝の都会の公園で 20 名くらいのグループが音頭をとりながら早足で行進しているのに出逢う。うっすらと汗さえ見える。インドネシアでは行列行進はスポーツの団体競技になっており、いかに威風堂々としているかを競う。朝からの行進はその練習であり健康管理をかねているのだろう。

参加者の年代も性別もバラバラであるが、共通点は制服のスポーツシャツを着ていることである。これもまたプリントには「どこそこの町内会」というようなことが書いてある。早朝に体操をやっている団体もある。これも町内会の主催である。

RT(Rukun Tetangga)は“近所との協調”という意味で「隣組」のことである。農村では RK(Rukun Kampung)で村の協調という意味である。ちなみにインドネシア社会のゴトンロヨンと並ぶキーワードは「ルクン(rukun)」である。ルクンは、親密、協調性という意味で日本語の“和の精神”である。

RTは30～100軒程が一単位になった強制参加組織であり、組長は市役所の窓口業務を担い出生、死亡届、居住証明を管理する。上意下達のチャンネルであり、役所に代わり物資の配給を行う。道路や溝の掃除、薬剤散布に葬式の手伝いや運動会も行う。組員に連帯責任をおわせ、行動や思想の監視させる役割も期待されている。江戸時代の“五人組制度”も引き継いでいる。

約10単位のRTが集まり町内会(RW=Rukun Warga)を結成する。住民は夜警(ボンド・マラム Bond Malam)を行う義務がある。労働奉仕をしない場合は代金を支払い、町内会の収入となり、サトパム<sup>5</sup>という夜警を雇用する。江戸時代の“木戸番”である。

高級住宅地では出入り口は1個所であり、そこに鉄道の踏切のようにバーを下ろし交通を遮断する私設検問所がある。白いシャツ、青いズボンの制服を着用したガードマンが不審人物の侵入をチェックする。ガードマンの費用は町内会で負担する。検問と夜警は兼務であることが多い。

RTとRWは高級住宅からカンブン(→728)の住民にいたるまでゴミ処理、労力奉仕など日常生活を規制している。8月17日の独立記念日の前の休日は町内総動員で美化運動が始まる。RWはさらに都市(区)単

<sup>5</sup> 高級住宅街には必ず SATPAM (Satuan Pengamanan)と呼ばれる夜警をRTで雇い泥棒等を終夜警戒している。SATPAMは退役軍人や元警察官で、右胸と左胸にそれぞれSATPAMのマークと自分の名前を縫い付けた制服を着ている。日本の自治会の「火の用心」の歳末パトロールのようにボランティアで夜回りをしているが、この国でも回り持ちでRONDA MALAMという同じ様な自警団がある。住民はこのRONDA MALAMに参加する決まりになっているが、種々の理由でこの自警団の夜回りに参加できない人は代わりに金銭の支払により義務が免除される。田口重久氏 HP

位、県単位の上位機関に編成され最終的には州単位になる。一般に軍人OBがトップに鎮座し全住民を把握するシステムである。

隣組制度は太平洋戦争の日本の軍政当局が 1944 年1月に導入したインドネシア占領中の遺物である。「Tonarigumi」はインドネシア語化した日本語(→967)であり、今日もインドネシアで RT と名を変えて制度として生きている。

オランダ植民地行政では住民の集会は禁止されていた。日本の占領行政が集会を奨励したのは戦争遂行の協力を組織化するためである。日本の撤退後も日本が持ち込んだ制度がインドネシアに定着したのは、インドネシア側に受け入れる基盤があったからである。稲作共同社会の原理が都市に持ち込まれている。

## 598. アリサンの集い

インドネシアには「アリサン(arisan)」という庶民の金融システムがある。インドネシア人は誰でも一つや二つのアリサンに参加している。特にジャワでは都市・農村をとわずアリサンは盛んである。職場、近隣、親族など色々なグループがある。掛け金額も多様である。

例えば 10 名のメンバー月に 10 万ルピアという定額を拠出すれば 100 万ルピア集まる。10 名であるから 10 ヶ月で一巡する。千名のメンバーで日に 1 万ルピアというアリサンであれば約 3 年に一度 1000 万ルピアの大金を入手できる。

日本でも頼母子講<sup>たのもしこう</sup>とか無尽講<sup>むじんこう</sup>として金融機関の不自由な農村地帯で行われていたものと同じである。インドネシアには個人融資を行う金融機関はない。あっても金利は 30%、50%と驚くべき高さであるのでまともな人は借れない。銀行から金を借りるのはチュコン企業(→491)とかファミリー・ビジネス(→492)であって返す気はさらさら無い連中であり、このためインドネシアの金融機関が破綻した。官庁の組織ぐるみの汚職を“国営アリサン”と皮肉るむきもある。

本題に戻り、庶民はTVや冷蔵庫など高額の電気器具などはこのようなアリサンを利用してまとまった金を手にした際に購入する。結婚や葬式などの資金源である。メッカ巡礼(→816)に順番に行くというアリサンもある。

インドネシアの青年が最も欲しがるとはバイクであり、そして実際に所有している。給料の 3 年分程の買い物はどうしてできるかといえば、アリサンに加えて親や親類、職場からの借金、ディーラーの割賦販売制度を総動員すれば何とかなるのもインドネシアだからである。

アリサンで入金する順番はセリで落とすかくじ引きである。セリの場合は早く資金を得たい人は定額以下で落とすアリサンもあるが、あまり一般的でない。早く落とした者と遅い者の金利の損得が気になるが、イスラム教徒はコーランで利子は禁止されているから利子の概念があまりない。

利子とあからさまに言わないが、実態としての利子はある。例えば 1 万ルピアを借りると12週かかって千ルピア(合計 1 万 2 千ルピア)返済するというアダット(慣習)が確立している地域がある。

アリサンのメンバーは会員宅に月に一度集まる。茶菓子か食事がふるまわれる。金融というよりはインドネシア人の付き合いの型である。特に金の必要でない人もあちらこちらのアリサンの予定ある人がいる。多くのアリサンに入っている人は付き合いのよい、人望のある人ということになっている。

余談であるが、比較的裕福な家庭がイスラム教の導師を招いて行うマジリス・タクリムまたはブンガジアン



というコーランの勉強会もある。これもアリサンと同様に人の輪を求めて集まりたがる稲作農耕民の民族性の側面<sup>6</sup>であるように思う。

## 599. オレオレ社会

インドネシアの長距離バス、船旅に鶏を持参する人が多いことに気が付く。鶏は生きたまま足を縛られて身動きならない状態で荷台に放りこまれている。ローカル線のプロペラ機内であるが、後方の荷物室から『コケッコウ』とけたたましい鶏鳴が聞こえた時は場所が場所だけに乗客全員が苦笑した。

鶏はこれから訪れる所への「オレオレ(oleh-oleh=お土産)」である。インドネシアのどこにでも鶏はいる。わざわざ運んでいなくても、行った先で買えばよいと思うが、土産というのは手間をかけて運ぶことに意義がある。鶏は日常の食物ではない、生きた鶏は新鮮そのものであることから喜ばれる品物である。

オレオレより手軽なお土産は「ブアブアン(buah-buahan)」である。ブアブアンの語源はブア(果物)である。インドネシア語の果物が複数になると「手土産」という意味の熟語になる。

長距離バスに乗り合わせるとバナナを一杯持ったおばさんがいる。これだけのものを一人で持てない。従ってバス乗り場にはお土産を運ぶための見送りや到着先では出迎えの人が大勢来ている。鶴見良行教授は東インドネシア紀行でお土産の多さを「バスでは体の半分、船では体と同じ位」と観察している。

日本人の旅行においても訪問先で少しのお土産の心づかいで人間関係をよくするならばすべて悪風と決め付けることもない。お土産の原点に戻れば金額でなくて誠意である。誠意があれば値段の高いものが喜ばれるとは限らない。インドネシアにはタンゴ・マタといい、旅の人から物をもらう文化があるらしい。私の経験ではインドネシア人の何か物欲しげな素振りに恐る恐る何が欲しいのか尋ねると名前を書いて欲しいとのことである。ありあわせの紙に漢字で名前を書いただけで大層喜ばれた。

井本彦成という熟年のインドネシア旅行家がおられる。日本人のほとんど行かない山や村を訪ねて『インドネシア紀行』シリーズ7巻を自費で刊行しておられる。その紀行文によれば僻地を訪れる際のお土産は日本の喫茶店の只で仕入れたマッチである。旅の上手な人とは自分で考えた良いお土産を用意できる人であることが分かった。

一般には使い捨てライターかボールペンで十分である。ちなみにマッチやライターは危険物であるので持ちこみ量には限度がある、念の為。

空港で公務員が日本人にいう“omiyage”がある。入国審査や荷物の検査の公務員に日本人はオミヤゲを配った。数時間かかるかもしれない手続が数十分で済むというそれなりの効果があったことは言うまでもない。

そのうちこちらが出すつもりはなくてもオミヤゲを要求されるようになる。例えばたまたま閑散時に入国審査官はパスポートをひねくりまわしながら「おみやげ」とつぶやいてパスポートを返そうとしない。こういう時は聞こえないふりをしているに限る。それから先は根競べである。

<sup>6</sup> アリサンは華人でも盛んである。中国語で「標会」といわれる。インドネシアのアリサンは標会を導入したのかもしれない。

<sup>7</sup> 鶴見良行著「辺境学ノート」

## 600. 稲作の変貌

オランダの植民地支配が導入した強制裁培制度(→282)、それに続くプランテーション(→505)の導入によって中部ジャワや東部ジャワの水田の多くが砂糖キビ畑に転換され、ジャワの伝統的な米作の生産体系は大きく破壊された。

この変化にもかかわらず稲作に基づくジャワ共同社会の仕組みはなお維持されてきたが、近代社会の発展はこれらの残存をも容赦なく追いやろうとしている。変わらないのは農民の貧しさだけである。

農村の収穫において村の全員が参加しその分前に与るバオン(→592)の制度は互惠に基づく分配として永年の社会慣行であった。故意に効率悪く作業を行うことによって貧しい人々に収穫作業に参加させて配分する。男性は参加できない。ゴトン・ロヨン(→593)といわれる相互扶助の一側面であった。

しかし、最近ではバオンに替って「テバサン(tebasan)」になってきた。テバサンとは業者が収穫を請け負う制度で、鎌を使って小人数で稲を根本からバッサバッサと効率的に切り倒す方法である。新品種の稲は背が低いのでアニアニは使いにくいだが、稲の粒が落ちにくくなる、同一時期の熟成するという品種改良の技術進歩があった。この結果、鎌による稲刈りは稲穂摘みと比べ効率は増進した。

テバサンでは収穫時の大勢の人手は不要であり、それまではアニアニさえ持っておればバオンの下でながしの収入にありつけた農婦の生活はますます苦しくなる。

緑の革命といわれる農業技術の進歩による収穫増は農産物価格の相対的低下を招いた。この結果、ジャワ農村の窮状はむしろ悪化した面もある。“貧困を共有(→640)”してきたジャワの農村もテバサンの導入に見られるように分極化の傾向にある。ジャワの農村には農民ではなく農業従事者だけといわれるように、多くの農民は農地をもっていない。スカルノ時代に自作農育成のために「農地法」が制定されたが、9月30日事件(→384)で実施は停止されたままになっている。

80年代になってトラクターの導入などによって稲作は機械化、省力化、効率化の方向に向かっている。開発政策の成果であるが、不在地主が増え、一方では土地のない農民が増え、過剰人口をかかえた農村問題の深刻さの度合いは増しているといえる。

車窓から垣間見る村の中央はどこも祭りかと思う人ばかりである。大勢の人は日常的風景であり、多くの潜在失業者をかかえている。農業機械化の進展は土地を持たない農業労働者を農村から都会へ押し出す圧力になっている。

田植え前の田の耕作においても水牛に代わってトラクターが導入されるようになった。ちなみにインドネシアでトラクターによる耕運機は全て『クボタ』という。日本の「クボタ社」の製品が普及しているという実態もあるが、クボタには「クルボウ・コタ(kerbau kota=町の水牛)」の語呂合せがあるからである。

⇒504.緑の革命、732.農村の変容

## 601. 水田と畑の差

《水田＝サワ(sawah)》と《畑＝ラダン(ladang)》は農業における土地の利用形態である。しかし水田であるか畑であるかは、農業技術としての土地利用をこえた社会の在り方に係わる問題であると考えたい。なんとなれば水田に基づく社会は定着型の共同社会となり、ゴトン・ロヨン(→593)の生まれる基盤であろう。

この点、灌漑によらない天水田は稲作であっても畑に近く、<sup>おかぼ</sup>陸稲は畑の範疇に入る。畑で最も原始的なものは焼畑農業に見られるように〈定着型〉の共同社会は必要でなく家族単位の〈移動型〉社会である。

総じて耕地の景観として《ジャワ島》は水田であり、《外島》は畑である。外島でもバリ島、ロンボック島(→212)では水田の比重が高い。もちろんスマトラ島にもスラウェシ島にも水田はあるが、限られた地域であり全般的には畑が優勢である。

ジャワ島の中でも東部ジャワと西部ジャワに地域差があり、東ほど米色が濃厚である。西部ジャワでも空港の離着陸の際には水田が広がって見え、バンドゥン近くのチアンジュール(→106)のように米作りの伝統の地域もある。

一方、東部ジャワの耕地には火山山麓の棚田に見られるように水田利用に執念のようなものがあるのに対して、西部ジャワの水田は比較的新しくそこそこの範囲にとどまっている。

〈ジャワ社会〉と〈スダ社会〉の微妙な差は水田耕作の程度とその歴史の長短に起因するところがありそうだ。ひいてはジャワ人の《内向・慎重派》に対してスダ人の《外交・楽観派》といわれるように両者の民族性にも影響していると思う。

東部ジャワに属するマドゥラ島(→151)も島の土地利用が水田に向いていないことがマドゥラ人の民族性の形成に寄与しているであろう。

中部ジャワでウオノギリ、グヌン・キドゥルなど南部のインド洋側の石灰岩台地は“シンコン地帯”といわれる。シンコンとはキャッサバ(→560)のインドネシア名である。豊穡なジャワで米の採れない丘陵地帯は貧困である。

外島で稲作が少ないのは気候、土壌から必ずしも水田に向いていないからである。にもかかわらずジャワ島から外島へ政策によって移住(→724)した農民は稲作に固執して失敗するケースが多い。

スマトラ島やカリマンタン島のジャングルでは原住民や開拓農民により焼畑農業(→882)が行われている。森林を焼いた灰を肥料にして1～2年は<sup>おかぼ</sup>陸稲などを栽培し 10 年ほど休ませて、また焼くというサイクルを繰り返すものである。

焼畑のサイクルがバランスしているときはよいが、人口増加でバランスが崩れると森林が回復せずにアランアラン草(→741)が蔓延し荒廃が急速に進む。このため最近では焼畑農業は規制をうけている。もっとも税金を取り立てるためにはむやみに移動されては困るという事情もあるらしいが。

## 602. イモ社会との対比

インドネシアの大部分は《稲作文化圏》に包含されるが、東インドネシアのマルク諸島、ニュー・ギニア島は南太平洋をおおう《イモ文化圏》の傘の下に入る。スラウェシ島あたりで東南アジアの稲作文化圏と南太平洋のイモ文化圏が重なる。

東南アジア島嶼地域の最初の農耕文化は根菜などのイモ文化であったが、アジア大陸からの稲作文化が勢力を伸長させた結果、イモ文化が次第に後退して、現在、その両文化がインドネシア国内の東寄りで<sup>きびす</sup>踵を接している。ただしインドネシアの農耕は基層として根菜であり、条件の良い所だけが稲作になった。日本でも稲作の前にイモ文化があった名残が<sup>しんせん</sup>神饌のイモであろう。

稲作は文化そのものの構造でもある。インドネシアのまた米にも〈水稻〉と〈陸稲〉があり、稲の起源としては<sup>おかぼ</sup>陸稲が古い、後からの水稻が一般的となり陸稲は焼畑地域に残存している。

《穀類》と比較して《根菜》のイモの特徴は種を植えてから収穫までの期間が3カ月から半年と短く灌漑も不要である。一方、イモの短所は一旦、土から掘りだすと腐りやすいので貯蔵期間が短いことである。イモの場合、貯蔵、輸送、集積が困難であるという特質は政治権力を醸成する余地がない。すなわち、太平洋に散在するイモ文化圏に強力な国家が存在しなかったのはイモそのものの植物学的事情に起因している。これに対して保存のきく米は強力な政治権力の存在を可能にする。

インドネシアの中での東西比較において政治力、経済力などあらゆる面において西が東を圧倒している。これは《米》と《イモ》の比較で多くの人口を支える米の優位が決め手であろう。

伝統のイモとはタロイモ、ヤムイモにことで、日本でいうサトイモ、山芋の系統である。しかし今のインドネシアでイモとは南米を原産地とするキャッサバ(→560)のことである。キャッサバは乾燥に強く、また茎を適当に切って突刺すだけで繁殖する。やせ地でも一応の収穫があるので熱帯圏の有力な畑作物である。皮をむいて5日程乾燥したものをオエクという。オエクを粉にすればタピオカという上質の澱粉になる。

インドネシアでは主食の自給自足をはかるため稲作地域でも畑作にキャッサバの植えつけが奨励されており各地で増産されるようになった。今ではタピオカはインドネシアの主要輸出品であり日本へも輸出している。

サツマイモ<sup>8</sup>も主要畑作物である。サツマイモは南米が原産地であるにもかかわらずコロンブス以前から南太平洋諸島で栽培されていたのは南米大陸と南太平洋諸島の間には文化を伝達するチャンネルがあった証拠とされている。

南太平洋のイモ文化圏は『サゴヤシ文化圏』でもある。サゴヤシ(→770)は低湿地を好む。従って畑作のイモとは栽培場所は異なる。しかし地域的にどちらも東インドネシアでイモ文化圏とサゴヤシ文化圏はほぼラップしている。

---

<sup>8</sup> ヤムイモ、タロイモと比較してサツマイモの生産力は高い。サツマイモの導入により根菜農業社会の人口は増大し、定着農業が可能となり、余剰食糧でブタの飼育が行われるようになった。イモ社会に与えた影響の大きさをサツマイモ革命ともいわれる。〈編者註〉里芋は苦いと言って嫌いな人がジャワ人に多い。貧乏人の食べ物とされているらしい。